



未曾有の大災害で幕をあげた2011年度は、館の修理や
展覧会の変更、節電など、様々な対応に追われました。
関係者の積極的なご協力に支えられた当館の一年をご報告します。



セガンティーニ展
震災による
中止をのりこえ
開催!

3月11日に発生した東日本大震災の影響により、当館にて開催が予定されていたセガンティーニ展(会期4/29~7/3)は一旦中止となりました。大地震と福島原発の事故直後の状況の中で、主な出品依頼先であるイタリア、スイスの所蔵者の多くが、貸出し作品とクーリエ(同行学芸員)に与える危険性を懸念したためです。

しかし、主催者による開催地の安全性についての状況説明と、監修者、各大使館をはじめとする関係者の全面的なご支援により、すべての所蔵先のご理解とご協力をいただくことができました。その結果、当館(東京会場)でのスタートは見送られたものの、予定どおりの内容と作品数(約60点)で、7月、第二会場だった滋賀県の佐川美術館を皮切りに、静岡市美術館を経て、最後に

当館にて11月23日から12月27日まで開催が実現しました。

ジョヴァンニ・セガンティーニ(1858~99年)は、スイスのアルプスの山々とそこに暮らす人々を描いた画家として知られています。日本でも明治期に紹介され、大正期には作品が国内のコレクションに招来されたことで、早くから親しまれてきた画家の1人です。また、19世紀末の前衛であるイタリア分割主義(細長いタッチによる画法)、象徴主義の代表的画家としての評価は、近年ますます高まりつつあります。

ところが、41歳で早世したセガンティーニの作品は数少なく、生前の人気の高さを反映して作品が世界に散らばり、しかも作品の状態がデリケートであるという事情のために、個展の開催は日本ばかりか海外でも限られ

ています。

多くの方々のご支援とご協力により、いくつものハードルをのりこえて開幕した本展は、国内では33年ぶり、第2回目のセガンティーニの回顧展であり、画家の全貌とその魅力にあらためて迫る貴重な機会となりました。3つの巡回館のうち、当館のみ震災の影響で開催が延期となり、開館日数が当初の半分になりましたが、多数の来館者を迎え(38,915人/31日)、無事に閉幕しました。

【展覧会データ】

展覧会名 | アルプスの画家 セガンティーニ 光と山—
会 期 | 2011年11月23日(水・祝)~12月27日(火)
主 催 | 損保ジャパン東郷青児美術館、NHK、NHKプロモーション、東京新聞
協 賛 | 損保ジャパン、グラウビュンデン州文化庁、スイス・プロヘルヴェティア文化財団
後 援 | イタリア大使館、スイス大使館
協 力 | スイス インターナショナルエアラインズ、スイス政府観光局

セガンティーニ展の延期中に チャリティー展を開催

大 震災の影響によりセガンティーニ展が一旦中止になったため、年末開催予定だった所蔵作品展「東郷青児とデザイン展」を代替開催したの続き、6月4日から7月3日まで「東日本大震災チャリティー 損保ジャパンコレクション展」を開催しました。本展は公益財団法人損保ジャパン美術財団が、震災被災地への支援活動として臨時に開催を決定したものです。

本展では、損保ジャパンと当財団が所有する作品群から、これまで当館に展示する機会の少なかった作品を中心に紹介しました。その中には、東郷青児の作品や東郷のコレクションをはじめ、普段は損保ジャパン社内に飾られている洋画、日本画も含まれ、

6つのセクションによる多彩な作品の数々を来館者にご鑑賞いただきました。

会期中26日間で7,319人の方々を迎え、全観覧料1,587,210円(一部当美術館に設置した募金箱への募金を含む)を、公益財団法人文化財保護・芸術研究助成財団に寄付しました。これは、文化庁が呼びかけている「被災文化財の援助と修復(文化財レスキュー事業)」への協力依頼に応じて実施したものです。7月15日には当財団の佐藤正敏理事長が文化庁を訪問し、文化庁長官の近藤誠一氏に目録を手渡しました。

これを受けて、8月2日、文化庁の「東日本大震災被災文化財等救援・修復活動への援助者に対する文化庁長官感謝状贈



呈式」において、「東日本大震災によって被災した文化財等の救援・修復活動に関し、一定の寄附又は救援物資の提供等により援助を行った」として、当財団に対し文化庁長官より感謝状が授与されました。

【展覧会データ】

展覧会名 | 東日本大震災チャリティー
損保ジャパンコレクション展
会 期 | 2011年6月4日(土)～7月3日(日)
主 催 | 損保ジャパン東郷青児美術館、
日本経済新聞社
協 賛 | 損保ジャパン

日 本赤十字社は、1977年の創立100周年を記念して、絵画・彫刻・工芸など各界の重鎮達から寄贈された美術品を100点以上有しています。そのきっかけが日本赤十字社本社新社屋落成時の東郷青児による大作寄贈であることから、東郷の記念館である当館では所蔵品の公開展を企画しました。折しも準備半

日本赤十字社 所蔵アート展の 観覧料を義援金に

ばで東日本大震災が発生し、日本赤十字社を挙げて震災対応に追われたことから、一時は中止も検討されましたが、観覧料を全額義援金として寄付するチャリティー展に趣旨を変え開幕に至りました。

日本赤十字社には、西南戦争下における創立の由来を記録した戦前の絵画群もあり、これには五世田芳柳(二世)や寺崎武男など日本近代美術史上興味深い作家たちによる力作が含まれています。会場では第一部で国際赤十字の思想と誕生を描いた作品を、第二部で戦前の絵画を、第三部で100周年の寄贈絵画を展示。高雅な寄贈品群とあわせて、現在も紛争・災害の地に赴き187か国に広がる世界最大のネットワークを有する救護団体である赤十字の思想と活動を紹介しました。



【展覧会データ】

展覧会名 | 東郷青児、梅原龍三郎からピカソまで
復興への想いをひとつにして
日本赤十字社所蔵アート展
会 期 | 2012年1月7日(土)～2月19日(日)
主 催 | 損保ジャパン東郷青児美術館
協 賛 | 損保ジャパン
協 力 | 日本赤十字社



日赤サービスのグッズ。左上のクマのぬいぐるみは、足の裏に赤十字マーク(Red Cross)がついている「CroKuma」。

SOCへの支援

『東 日本大震災被災文化財復旧支援事業 Save Our Culture ～心を救う、文化で救う～(略称「SOC」)』を支援するため、寄付を行いました。SOCは、被災した文化財の復旧助成を行う事業であり、文化庁の

協力を得て公益財団法人文化財保護・芸術研究助成財団とワールド・モニュメント財団との連携により実施されています。

今後も被災した文化財復旧のための支援を継続していきます。

モーリス・ドニの遺族が作品を寄贈 「日本の人々を元気づけたい」

2011年9月10日から11月13日まで、当館では「モーリス・ドニ—いのちの輝き、子どものいる風景—」展を開催しました。この展覧会は震災の影響で一時開催が危ぶまれましたが、関係者の皆様のお力添えにより無事開催され、4万人を上



《抱き合うクレールとポール》を持つ
クレール・ドニ氏と原口秀夫館長
写真提供: 毎日新聞社

回る多くのお客様をお迎えすることができました。本展覧会の開催に向けて、特にご尽力をいただいたのが、監修者のひとりで、モーリス・ドニの孫娘にあたるクレール・ドニ氏です。2012年1月12日、このクレール氏より、展覧会開催を記念して、そして日本の人々を元気づけたいという思いを込めて、モーリス・ドニの作品をご寄贈いただきました。

ご寄贈いただいた作品は以下の3点。息子フランソワ、ならびに孫のシャルルの誕生を知人や親戚に知らせる《出生通知状》(木版画)が各1点、そして孫たちが抱き合う姿を描写した石版画1点です。なかでもクレール氏ご自身が従兄弟にあたるポールといっしょに描かれている石版画《抱き合うクレールとポール》(1942年)には、「大好きな美



左:《息子フランソワの出生通知状》1915年
右:《孫シャルルの出生通知状》1942年

術館を作品の中からいつまでも見守ってほしい」というクレール氏ご自身のメッセージも込められています。

【展覧会データ】

展覧会名 | モーリスドニ—いのちの輝き、子どものいる風景—
会 期 | 2011年9月10日(土)～11月13日(日)
主 催 | 損保ジャパン東郷青児美術館、NHK、NHKプロモーション、毎日新聞社
共 催 | モーリス・ドニ総目録編集室
協 賛 | 損保ジャパン、みずほ銀行、日本写真印刷
後 援 | フランス大使館
協 力 | モーリス・ドニ美術館、エールフランス航空

国内外の現代アートを収集する 田口弘氏のコレクションを紹介 した「グローバル・ニュー・ア

ト」展(7/12～8/31開催)では、協賛のUBS銀行が被災地の子ども達を展覧会に招待しました。

UBS銀行は、数万点にのぼる現代アートのコレクションをはじめ、社会貢献活動を積極的に進めています。その活動の中で縁のあるNPO団体「Learning for All (LFA)」が、放射能を避けて都内に避難していた子どもたちに教育支援を行っていたため、UBS銀行がLFAを介して小学生から高校生までの15名とその保護者を休館日の本展へ招くツアーを開催しました。当日、

グローバル・ニュー・アート展 被災地の子ども達を招待

あいにくの雨の中を集合した子ども達は、貸しきりの静かな館内で、デミアン・ハーストや村上隆、奈良美智など第一線のアーティスト達の作品とじっくり向きあいました。真剣な眼差しでアーティスト達の工夫を発見したり、自由な解釈や表現で語り合ったりした後は、



コーナーの一角に展示してあったイタリア家具B&Bのソファで一休み。それぞれに楽しみ方を見つけ出し、目が輝いた半日でした。

【展覧会データ】

展覧会名 | タグチ・アートコレクション
GLOBAL NEW ART
現代アートをもっと楽しむために
会 期 | 2011年7月12日(火)～8月31日(水)
主 催 | 損保ジャパン東郷青児美術館、読売新聞社、美術館連絡協議会
協 賛 | 損保ジャパン、ライオン、清水建設、大日本印刷、UBS
特別協力 | 田口弘、EMアウ
企画協力 | 広本伸幸
協 力 | アート・オフィス・シオバラ、小山登美夫ギャラリー、B&B Italia

2011年度の 鑑賞教育活動

新 宿区立の全小中学校を対象に、図画工作・美術科の正規授業としての「対話型鑑賞」を本格実施して3年目の2011年度は、小学校29校と中学校6校が参加しました。『学習指導要領』改善の基本方針に「自分の思いを語り合ったり、自分の価値意識をもって批評し合ったりするなど、鑑賞の指導を

重視する」とあり、ボランティアのガイドスタッフ(登録50名)が学校の「事前授業」と美術館の「鑑賞会」で、子ども達の対話力向上に努め、活躍しました。

小学校の事前授業では、展示作品から選んだ10点のアートカードを元に、児童が読札を作成し、班毎にカルタゲームをし、中学校の事前授業では、生徒が選んだ作品の「鑑賞シート」を仕上げ、上映されたスライドの前で発表するという形式が定着しました。鑑賞会では、5～10人ごとの班活動とし、

ガイドスタッフが引率し、対話をしながら鑑賞する50分間と、子どもたちが自由に鑑賞する20分間を組み合わせる形で実施しています。



館内改修とLED照明の導入

ひまわりコーナー、壁、カーペットの改装

当 館のポスト印象派3作品(ゴッホの《ひまわり》、ゴーギャンの《アリスカンの並木路、アルル》、セザンヌの《りんごとナプキン》)を固定ケースの中で展示して20年が過ぎ、これまでに来館者からこの展示方法につき様々なご意見を賜りました。その中でも、「セザンヌ作品の青色が、青い壁色と重なり、作品が暗く見える」というご指摘が数多くありました。

国内外の主要美術館の壁と床の色を調査し、当館にとって最適な空間づくりを目指し改装しました。4月に実施した館内の壁とカーペットの改装と併せて固定ケース内の壁色も白色にし、「ひまわり展示コーナー」のゲートを撤去することで、より開放的な空間で、ポスト印象派の作品をゆっくりと鑑賞できるようにしました。館内の革張り長椅子10脚も新調しました。



節電に有効なLED

震災後の節電対策が求められている社会状況を鑑み、11月に、高い演色性を備えた、美術館用LEDスポットライト120灯を展示室に導入しました。これまで使用していたスポットライトは100Wのハロゲン照明でしたが、発熱量が多く、消費電力と作品保護の観点から万全ではありませんでした。今回のLEDスポットライトは、消費電力22W(LED光源)で、消費電力、発熱量、紫外線量を低くすることが可能となりました。

LEDで作品本来の色彩を見せる セガンティーニ展 ～イタリアの光、アルプスの光～

このたび導入した美術館用の最新型LEDスポットは、照度だけでなく光の色を調節できることが特徴です。4色(赤緑青白)の光をブレンドすることで、自然光に近い演色性に優れた光を作り出せるのです。

作品の色は光の色で決まります。作家が表現した色を見る人に正確に伝えることは、作品を展示する美術館の重要な役割。この視点に立ち、セガンティーニ展では、展示室の統一感にも配慮しながら、画家が制作した環境にできるだけ近い光をあてることで「作品本来の色彩」を再現することに努めました。初期から晩年までの画風の変遷を紹介する本展では、制作環境が大きく分かれる時代(初期イタリア時代、中期以降アルプスで活動したスイス時代)の作品に、それぞれ異なった照明をあてました。

*イタリアの光

画家として出発したイタリア時代のセガンティーニは、伝統的な暗い色を使い、身近な情景を題材にしました。19世紀には電灯が普及しておらず、室内での制作は窓から入る外光が頼りでした。活動拠点の北イタリアは霧が多く晴天日が少ないため、照明はアトリエに入る柔らかな自然光をイメージしました。



初期イタリア時代のセクション：イタリアの光

*アルプスの光

アルプスに魅せられた画家は、澄んだ光を求めてより高い山地へ転居し、明るい色彩に満ちた世界を表現するため、戸外で制作しました。多くは日中に描いているところから、照明は真昼の日光が散乱する白い自然光をイメージしました。照度も高めにすることで、分割主義の原色を重ねた細かいタッチとともに鮮やかな色彩が蘇りました。



中期以降のスイス時代のセクション：アルプスの光

REPORT

損保ジャパン東郷青児美術館レポート No. 39

発行日 | 2012年3月31日(年1回発行)
編集・発行 | 公益財団法人 損保ジャパン美術財団
デザイン | 若林純子
印刷 | 吉田印刷

公益財団法人 損保ジャパン美術財団
損保ジャパン東郷青児美術館
〒160-8338 東京都新宿区西新宿1-26-1 損保ジャパン本社ビル42階
電話 03(3349)3081 [代表] ファックス 03(3349)3079

